

〈研究報告・実践研究報告〉

## 領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討

～領域及び保育内容の指導法に関する科目（人間関係）の授業実践から～  
Examination of the Contents of the Class that Connects the Specialized  
Knowledge of the Area and the Childcare Plan:  
Class Practice for Subjects Related to the Teaching Method of the Area  
and Childcare Content (Human Relationships)

小林 美沙子

(短期大学部保育学科)

Keyword：保育者養成、専門知識と実践力、領域「人間関係」

### 1. はじめに

近年、我が国の保育を取り巻く環境の変化と共に、社会から求められる保育者の専門性のあり方は見直され、その専門性をどのように育成していくのが課題としてある。保育者養成校においては、2019（平成31）年4月より新しい幼稚園教諭及び保育士養成課程がスタートした。新しい教職課程（幼稚園教諭課程）では、科目区分の大括り化と履修内容の充実を図ることにより、教員に求められる資質能力<sup>1)</sup>を有した教員の育成が目指されている。科目区分の大括り化では、これまでの「教科に関する科目」と「教職に関する科目」等に分けられていた科目区分を廃し、「教科に関する科目」が「領域の専門的事項」とされ、領域の専門的内容と指導法を一体的に学ぶことが可能な「領域及び保育内容の指導法に関する科目」として配列し直された。その背景には、これまでの教職課程では「教科に関する科目」と「教職に関する科目」の中の「保育内容の指導法」との関連がみえにくい状況があった。しかし、神長（2017）が示すように、幼児期の学校教育を実践していく専門家としての幼稚園教諭に求められる資質能力は、平成30年度実施幼稚園教育要領に示す5領域の教育内容に関する専門知識を備えた専門性と、5領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等の実践力の二つの側面から見ていく必要がある。そのため、新しい教職課程の科目配列を活かし、学生が実践に必要な技術とそれに裏付けされる知識とを関連させて身に付けられる授業内容を検討していくことが今後の課題となる。

そこで、本稿では、新しい教職課程がスタートした今年度、筆者が短期大学の授業として取り組んだ「幼児と人間関係」、「保育内容・人間関係の指導法」

の授業実践を取り上げ、その成果と課題について示す。その上で、5領域の教育内容に関する専門知識と実践力の一つである保育構想(保育案の作成と教材研究)とのつながりに着目し、領域の専門知識と指導法を一体的に学ぶための授業内容について検討する。

## **2. 「幼児と人間関係」「保育内容・人間関係の指導法」の目的と目標**

### **1) 授業の位置づけ**

「幼児と人間関係」、「保育内容・人間関係の指導法」の授業は、幼稚園教諭及び保育士養成課程の専門科目の一つである「領域及び保育内容の指導法に関する科目」に位置づけられる授業である。「幼児と人間関係」の授業は、領域に関する専門的事項を扱い、「保育内容・人間関係の指導法」の授業は、保育内容の指導法を扱う授業として構成されている。これらの授業は、短期大学部保育学科の1年生が、秋学期に学修する幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格を取得するための必修科目として位置づいている。

### **2) 授業の目的及び目標**

#### **(1) 「幼児と人間関係」の授業の目的及び目標**

「幼児と人間関係」の授業では、領域「人間関係」の指導の基盤となる関係発達論的視点について学び、幼児が他者との関係や集団の中で人とのかかわる力が育つことを理解することを授業の目的としている。そのため、授業の到達目標として、現代の幼児の人間関係に影響を与えている社会的要因について関心をもち、保育の中で保障すべき保育内容に関する知識への理解を深めること、特に領域「人間関係」の指導の基盤となる他者との関係や集団との関係の中で乳幼児期の人と関わる力が育つことを理解すること、としている。

#### **(2) 「保育内容・人間関係の指導法」の授業の目的及び目標**

「保育内容・人間関係の指導法」の授業では、「幼児と人間関係」の授業で学んだ学問的な背景や基盤となる考え方を踏まえ、乳幼児が人との豊かなかわりを育んでいくための保育の方法を習得することを授業の目的としている。そのため、授業の到達目標として、幼稚園教育要領に示される幼稚園教育の基本を踏まえ、幼稚園教育において育みたい資質・能力について理解し、領域「人間関係」のねらい及び内容を理解すること、領域「人間関係」にかかわる様々な指導場面を想定した保育を構想する方法(保育案の作成、模擬保育、振り返り)を身に付けること、としている。

## **3. 授業内容と学生の学び**

### **1) 授業内容の構成と工夫**

授業は全て、同一の教員が担当した。両授業の授業内容は、2-2)で示し

た授業の目的および目標が達成されるように、また、専門知識と保育構想（保育案の作成と教材研究）に関連が生まれるように、以下の点を工夫した。

- ① **授業配列**：専門知識を学習したうえで保育構想を行う「知識→実践（保育構想）」となる科目配列とした（表1）。具体的には、前半8回に「幼児と人間関係」の領域に関する専門的事項の授業を行い、後半8回に「保育内容・人間関係の指導法」の保育内容の指導法の授業を行った。
- ② **授業形式**：全16回の授業の中に講義形式とグループワーク形式（表1中GWと記載）の二つの形式を用いた。特に、「保育内容・人間関係の指導法」の授業にグループワーク形式を取り入れ、前半で学んだ専門知識を学生間で交流しながら主体的に学びを進められるようにした。
- ③ **学習内容の提示の仕方**：学年区分（例えば、3歳児）として示す場合と項目（例えば「協同性の育ち」）ごとに示す場合の両方を取り入れた。特に、「幼児と人間関係」の授業において、乳幼児の人とのかかわりの特徴を学年ごとの区分（例えば、3歳児の発達と人とかかわり）として提示し、学生が自分の体験（学外実習）と結びつけ、保育案作成時の「乳幼児の実態」がイメージしやすいように工夫した。  
 \*受講者の全員が保育所での実習を経験している（8月に10日間）。しかし、観察実習のため保育案の作成については未学習である。
- ④ **ICTの活用**：学生が保育現場をイメージし、作業として楽しめること、自分の学びが可視化され振り返りが促されることの2点を考慮し、教材研究時の様子を紹介するポートフォリオの作成を通して行うこととした。

表1：「幼児と人間関係」「保育内容・人間関係の指導法」の授業概要

	科目名	回数	内容	形式
専門的 領域に 関する	幼児と人 間関係	1	保育の基本について	講義
		2	現代社会の幼児を取り巻く環境と人間関係	講義
		3	3歳未満児における人とかかわりー身近な大人との関係を基盤として育つ姿	講義
		4	3歳児の発達と人とかかわりー保育者との関係を基盤として	講義
		5	4歳児の発達と人とかかわりー友達関係の広がり	講義
		6	5歳児の発達と人とかかわりー友達関係の深まり	講義
		7	幼児期の協同性の育ち	講義
		8	中間まとめ	講義
保育内 容の指 導法の	保育内 容・人間 関係の指 導法	9	幼稚園教育要領に示される領域「人間関係」の全体像をつかむ	講義
		10	自立心を育む保育の展開と援助	講義
		11	道徳性・規範意識の芽生えを育む保育の展開と援助	講義
		12	人とかかわりや遊びを広げる保育の環境 ーデジタルカメラを活用したポートフォリオを中心に	講義・GW
		13	人とかかわりを広げる遊びの展開を考える①：保育案の作成	GW
		14	人とかかわりを広げる遊びの展開を考える②：教材研究・模擬保育	GW
		15	人とかかわりを広げる遊びの展開を考える③：教材研究・模擬保育の振り返り、ポートフォリオの作成	GW
		16	人とかかわりを広げる遊びの展開を考える④：発表・全体の振り返り	GW

## 2)グループワークについて(第 12～16 回の授業)

保育構想の方法を学ぶため「計画、実践、振り返り」をグループワークにより行った。活動の中で学生は、グループごとに保育案の作成、教材研究・模擬保育、振り返り、発表資料の作成を行った。

### (1)保育案の作成(第 13 回の授業)

保育案の作成については、初めての学習であることを考慮し、乳幼児の実態から保育を構想する保育案の構造を身につけることを学習の中心として活動を進めた。具体的には、ワークシート<sup>2)</sup>(図 1)に取り組みながら、保育案の構造である「乳幼児の実態→ねらい・内容→活動の展開」の流れを学習できるようにした。また、活動の設定に際し、「人とのかかわりを広げる遊び」を考えるように提示した。

活動名(○歳児、△月)		
活動の「ねらい」と「内容」 *子どもが主眼。 *「ねらい」(心身・態度・能力) *「内容」・経験する事柄。	「ねらい」 ○ ○ 「内容」 → →	
乳幼児の実態 *文献等を参考に調べて記入する。 *特に、年齢と月によって乳幼児の実態は違うため注意。 *活動の「ねらい」「内容」にうかがえるものに配慮する。		
活動を選んだ理由 *乳幼児の実態に基づいて記入する。		
遊びの展開 *「活動の流れ(環境の構成)」には、語や文字を使って記入する。 *「乳幼児の遊び姿(予想)」は、音画の比喩(環境の構成)。 *全組がそのほか、「保育者の役割・配慮」も考えてみよう。	活動の流れ(環境の構成)	乳幼児の遊び姿(予想)
遊びを広げる(楽しくなる)ための仕掛け *活動の流れ(環境の構成)で支えたいことを記入する。		

図 1 : 保育案作成のためのワークシート



図 2 : 保育案の内容を話し合う学生

表 2 : 学生が考えた保育内容

	タイトル	内容	対象年齢
1	目指せ東京オリンピック	サーキット	5歳児, 9月
2	ビリビリバラバラペタンコ	ちぎり絵でオニづくり	3歳児, 1月
3	みんなでなろうよ! 島根はませ	カルタ	5歳児, 6月
4	目指せ!! カルタ名人	カルタ	5歳児, 1月
5	ペタペタキッズ	フィンガーペインティング	3歳児, 9月
6	どのどうぶつがはやいかな? ~どうぶつまねっこリレー~	サーキット	3歳児, 10月
7	目指せ! コマ名人	コマづくり	4歳児, 1月
8	おいでよ、私たちのたべもの屋さん	お店屋さんごっこ	5歳児, 11月

## (2)教材研究・模擬保育(第 14 回の授業)

授業の中では、実際に自分たちが教材を作成したり、子どもの気持ちになってやってみたりする教材研究を重視した。実際にやってみることで、保育案の作成の時には思いつかなかった環境構成や保育者の配慮などに気付く学生もいた(内容は以下を参照)。

### ■教材研究をして気付いたこと ~学生の授業の感想より

- ・自分たちがやってみて、先生の配置や物の配置をどうするかがとても悩むところでした。子どもがやりやすいことが一番と考えてやるのが大事だと思いました。
- ・実際にやってみて楽しかったのが一番だったが、水の量の調整や思ったより絵の具が飛んで汚れることが課題になったと思った。



左図: まずは保育案通りに手でペイントをやってみる学生。

右図: 「子どもは足もやりたがるかも?」と思い、足でもやってみる学生。

図 3 : 教材研究・模擬保育をする学生

## (3)教材研究・模擬保育の振り返り、ポートフォリオの作成(第 15 回の授業)

教材研究・模擬保育の振り返りは、発表資料の作成と連動して行った。発表

資料は、保育案とポートフォリオの両方を 1 枚程度の模造紙にまとめて作成させた。具体的には、授業の第 12・13 回で作成した保育案をもとに、教材研究・模擬保育を行って気づいたことをグループで話し合い、保育案に修正を加えさせた。また、ポートフォリオについては、教材研究・模擬保育を行った様子とその成果と課題が発表を見る人に分かるように写真と文字を用いて作成させた。



図 4：活動を振り返りながら資料の作成をする学生

#### (4)発表・振り返り(第 16 回の授業)

発表は、ポスター形式を用いた。発表者は、資料をもとに言葉で内容を説明すると共に、実際に作成した製作物を見せたり、遊びの動きをやってみせたりしていた。発表を聞く側は、発表者の説明を聞きながら、発表の良い点や改善点（教材と年齢、ねらいと活動内容など）についてワークシートに記入した。また、活動全体を楽しむ仕掛けとして学生による投票を行った。投票は、「資料作成」と「発表方法」の 2 つの部門を設定し、「いいね!」と思ったグループに投票することとした。



図 5：発表をする学生



図6：「資料作成部門」の優勝ポスター



図7：「発表方法部門」の優勝ポスター

### 3) 学生の学び

学生は、「幼児と人間関係」「保育内容・人間関係の指導法」の両授業において、毎回、授業を通して学んだことを「ミニットペーパー」に記入し、提出している。また、「保育内容・人間関係の指導法」の授業では、最終課題としてグループワーク（第12～16回の授業）を通して学んだことを記入し、提出させた。これらの学生の振り返りの記述から、①協同すること、②子ども理解、③学びのつながり、④保育案の作成、⑤ICTの活用、の5つのキーワードが抽出された。以下では、学生の学びが見て取れる記述を紹介する。

#### ① 協同すること

- ・みんなの性格やいいところを発見しながら活動をして、人と関わるとこんなにも新しい発見と出会いがあるのだなと感じた。また、自分の中の世界が広がるなと思った。
- ・対立をすること（自分の考えを述べ合うこと）で折り合いをつけ合ったり、相手の意見をしっかりと聞き、尊重しあったりすることができるのだということを学ぶことができた。

- ・グループで協力して取り組むことで、計画を立てている様々な視点からアプローチし、子どもに合った遊びを考え実践することの大切さを学ぶことができました。

## ② 子ども理解

- ・ただ単純に「楽しい」だけでは駄目なのだということを学びました。…フィンガーペインティングを実際にやってみる時、絵の具を手につけた時の子どもたちの反応、段ボールにペイントした時の子どもの反応…ひとつひとつの段階を踏んでいくと共に、子どもたちの反応を考えながら活動することにつとめました。
- ・子どもが興味を持っているものだけではなく子どもたち同士の関わり合いから見られる実態を踏まえて考えることがとても大切だと学んだ。
- ・その活動は何歳に適した活動なのか、子どもの発達状況をきちんと把握することがとても大切であると感じました。また、子ども達の発達状況に応じてどこまで保育者が準備をしておくべきか子ども理解がとても大切であるということがわかりました。
- ・(子どもになりきって遊んでみると) 私たちは普段何も気にせずにお金のやり取りをしているけれど、子どもにとっては、お金の計算だけではなくお金とモノの交換が楽しいのかもしれないと新たな視点に気付かされた。

## ③ 学びのつながり

- ・この授業を通して感じたことは、保育所実習をはじめとした今まで学習してきた様々な授業はすべてつながっていて、一見それぞれ別々のことを学んでいるようだけどその点と点はつながっていった保育者としてのスキルを身につけているのだなと感じました。
- ・(活動内容を決める時) 実際に自分たちが夏に行った実習でおこなっていた活動を思い出してみても、フィンガーペインティングをおこなっていた保育所があったので、その案を採用して決めました。

## ④ 保育案の作成

- ・ねらいと内容、保育者の願い、保育者の援助など全てに一貫性やつながりを持つことも重要だと学んだ。
- ・保育内容を考えるうえで子どもの実態を踏まえて遊びを考えることの大切さを学んだ。ただ単に遊びを考えるのではなく、年齢や月齢に合わせた遊びを考えたり、保育者の配慮を考えたりすることが分かった。
- ・今まで保育案を書いたことがなかったため、どのように考え、まとめるべきかととても悩んだ。…今回保育案を書いて感じたことは、保育活動は保育現場でみられる子どもたちの姿から子どもが興味を示し、主体的に参加できるような配慮や工夫が沢山されているということだ。保育者はクラスの



中の流行や子どもができるようになったこと、関心・興味を持っているものなどに敏感になる必要があることがよく分かった。

#### ⑤ ICT の活用

- ・ 写真はその時の様子を伝える方法の一つだから子どもの様子が伝わるように撮らなければならないと感じました。
- ・ (写真を印刷する作業は) パソコン操作の苦手な私にとってはかなり時間のかかる作業だったが、これを通して少しでもパソコンに慣れることができて良かったと思う。

#### 4. 考察

5 領域の教育内容に関する専門知識と実践力の一つである保育構想(保育案の作成と教材研究)がつながる授業内容について、3-1)で示した授業内容の構成と工夫4点から考察する。

- ① **授業配列**: 学生は、「知識→実践(保育構想)」となる科目配列とすることで、知識と実践を結びつけて学ぼうとする姿が見られたと考えられる。特に、第7回の授業で取り扱った「幼児期の協同性の育ち」と第12回以降の授業で行ったグループワークとの間でつながりが見られる。学生はグループワークを通して「人のよさを知る・認める」「折り合いをつける」という気付きを示していた(3-3)-①)。これは、第7回の授業で取り扱った内容と重なっている。前半の授業を通して学生自身が学んだ知識とグループワークでの実体験とを結びつけながら、気づきを広げていたと考えられる。
- ② **授業形式**: 講義とグループワークの両方の授業形式を取り入れることで、個人が獲得している知識を他者と共有し、学びを深める姿が見られたと考えられる。学生は、グループワークを通して、これまでの授業や保育所実習での経験を活用し、初めて取り組む保育案の作成を積極的に取り組もうとする姿が見られた(3-3)-①③④)。グループの友達と対話をすることで、他者の視点を取り込み、新たな気付きを生んでいた。そのため、「他者の視点を取り込む」という点においてグループワークは有効であったと考えられる。しかし、対話を生むためにはその素地となる領域に関する専門知識が必要であり、そのための教材の工夫が授業内容として大切であると考えられた。
- ③ **学習内容の提示の仕方**: 乳幼児の人とのかかわりの姿を学年区分として示す場合と項目ごとに示す場合の両方を取り入れた。学年区分として示した授業では、授業後の感想(ミニットペーパー)に学外実習で観察されたその学年の場面と関連付けて感想が書かれていることが多かった。また、項目ごとに示した授業では、保育実践の中でそれらの内容を子どもたちに育

てることの必要性やそのための保育者の役割についての感想が見られた。両方の提示があることで、学外実習での経験の意味づけが学生の中でなされ、知識と経験が結びついているのではないかと考えられた。また、そのことが保育案の構想における子ども理解の大切さや保育案の構造の理解へと結びついたのでないかと考えられる(3-3)-②④)。

- ④ ICT の活用:教材研究の様子を資料として作成する際に写真を活用することで、自分自身の活動が可視化され、振り返りが促されたと考えられる。学生は、普段から写真を撮るという作業に親しんでいるが、それを人に伝える媒体であるポートフォリオとして作成することに難しさを感じている場面もあった。しかし、写真を通して子どもの様子をより捉えたいと感じたり、パソコン操作が苦手でも頑張ろうとする姿が見られたりした(3-3)-⑤)。保育者を目指す学生の中には、ICT の活用が苦手な学生もいるが、授業の中で保育実践とのつながりを感じ、無理なく取り組める教材の工夫が必要であると考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、領域の専門知識と実践力を一体的に学ぶことができる授業内容について実践事例をもとに検討してきた。その中で、学生の視点に立った主体的・対話的な活動を生む授業構成と教材の工夫が重要であった。特に、専門知識の獲得を促す授業内容については、保育実践との関連をどのように生み出すのが課題である。さらに、専門知識から保育構想(保育案の作成、実践、振り返り)への学びは、学生の学習状況や他の科目や授業との連携も必要である。短期大学2年間の学びの中でどのようなカリキュラム構成によって学生を育てていくのか、検討することも必要である。これについては今後の課題としたい。

## 注

- 1) 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(中教審答申)では、①教員として不易とされる資質能力、②新たな課題に対応できる力、③組織的・協働的に諸問題を解決する力、とされている。
- 2) ワークシートは、開仁志(2008)「これで安心!保育指導案の書き方」北大路書房、を参考に筆者が作成した。

## 引用文献

神長美津子(2017)1章教職課程認定基準の改正の概要,無藤隆代表保育教諭養成課程研究会「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～」萌文書林, p.11